

付録 3:協働ギャザリング 2016(年度末報告会)
—「プロジェクト・マネジメント」と「協働ガバナンス」の評価
(個別案件)

【付録3:「プロジェクト・マネジメント」の評価と「協働ガバナンス」の評価(個別案件)】
 協働ギャザリング 2016 年度末報告会)における指摘事項

【表付録 3-1: 協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく
 「プロジェクト・マネジメント」(事業)／「協働ガバナンス」(協働)の有効性(プラス評価点)】
 ※[]内は採択された協働取組事例

| | | プラス評価点 | | | |
|-----------------|---|-------------------------|--|----------|---|
| [1] 公害資料館ネットワーク | 事業 | 効率性 | ● 現場と専門的知見とのリンク・活用。[1] | | |
| | | 効果／目標達成度 | ● 受け身な仕事になりがちな資料館の活性化に貢献。[1] ● 地域課題を他地域と共有することで、新たな気づきと解決策の可能性が見えそう。[1] ● 公害の共有はとても良い。伝えることは大切なこと。[1] ● 各資料館の見る視点のシフト。(地域内→全国)[1] | | |
| | | 計画妥当性 | ● 体系的なプランニング・提案・ステークホルダーとのリンク。[1] | | |
| | | 関係主体の巻込度 | ● 行政への要求から多様な主体に巻き込みによる協働に変わったこと。[1] ● 相互参照だけではなく、協働ビジョンを語る場作り・ネットワーク。[1] ● ビジョンを作って目的をしっかりと共有したこと。[1] ● 様々な主体の“フラット”な関係作りができたこと。[1] | | |
| | | 関係主体の満足度 | ● フォーラムで地域(地元)が変わる。[1] ● 参加しやすいオープンなフォーラムと深めるクローズドな研究会の使い分け。[1] | | |
| | | 社会的インパクト | ● 世界発信はすばらしい。これからの開発には重要な視点。特に新興国(インド、中国など)にアピールしてほしい。[1] ● 公害の全体像が共有された。[1] ● 体験機会の場の認定を取得。[1] ● 各資料館の見る視点のシフト(地域内→全国)[1] | | |
| | | 自立発展性 | ● ネットワークの“機能”を推していくとよい。[1] ● 全体とプロジェクトにおける協働ビジョンを作成。専門性+現場意識。[1] ● ビジョンを作って目的をしっかりと共有したこと。[1] | | |
| | 協働 | 開始時の状況 | ● 資料館の内の一つが先導しているのがすばらしい。[1] | | |
| | | 運営制度の設計 | ● “場に対する信頼関係”がいい。[1] ● ステークホルダーが仲間になった。[1] ● 様々な主体の“フラット”な関係作りができたこと。[1] | | |
| | | 協働のプロセス | ● 要求から協働へ、信頼から仲間へ。[1] ● 全体とプロジェクトにおける協働ビジョンを作成。専門性+現場意識。[1] ● 相互参照だけではなく、協働ビジョンを語る場作り・ネットワーク。[1] ● 行政への要求から協働に変わったこと。[1] ● フォーラムで地域(地元)が変わる。[1] ● ビジョンを作って目的をしっかりと共有したこと。[1] ● 各資料館の見る視点のシフト。(地域内→全国)[1] | | |
| | | [2] 人と海鳥と猫が共生する天売島 連絡協議 | 事業 | 効率性 | ● 大学と連携した学生ボランティアのアイデア。[2] ● 預かりボランティアは地域の人が参加できていい。[2] ● 地域全体の取り組みになっている。[2] |
| | | | | 効果／目標達成度 | ● 観光とつながっていることで多くの理解を得られている。[2] ● 馴化作業がいい。ただ猫を譲渡するのではなく、人と猫と海鳥が共生する環境のためにどうすればいいかが分かりやすい。[2] |
| | | | | 計画妥当性 | ● 即「駆除」に頼らないで「馴化」という落としどころを共有したこと。[2] ● ボランティアと観光振興を掛け合わせた。[2] ● 溝鼠対策の必要性に共感。[2] |
| | | | | 関係主体の巻込度 | ● 取り組み全体が楽しそう。ノラネコによってコミュニケーションが生まれていると思う。[2] ● 天売島への往復チケットがよい。[2] ● 預かりボランティアは地域の人が参加できていい。[2] ● ボランティアを活用した地元との連携。[2] ● ボランティアによる取り組みであることと多様な主体との連携を図っていること。[2] ● 地域全体の取り組みになっている。[2] ● 企業との連携。(CSR・CSV)[2] ● ホームセンターとの連携。[2] ● 一見関係なさそうな企業や観光、道外の方の巻きこみ。[2] |
| 関係主体の満足度 | ● 観光とつながっていることで多くの理解を得られている。[2] ● 預かりボランティアで市民、大学生、動物園とたくさんの方がかかわっているところがす | | | | |

| | | | | |
|-----------|------------------|---|---|---|
| 会 | | ごい。[2] | | |
| | 社会的インパクト | <ul style="list-style-type: none"> ● 観光へつなげるところがいい。[2] ● 天売猫を観光ツールに。[2] ● 観光客が増えたことは参考になる。[2] ● 外来種・外来生物でも同じモデルができるのでは。[2] ● 地域猫の問題に悩む他地域にも活用してほしい。[2] ● ノラネコ対策から地域振興につなげるのがいい。ぜひ参考にしたい。[2] ● 地域で連携したよい取り組み。類似課題を抱える他の島の活動へぜひ発信共有を。[2] | | |
| | 自立発展性 | <ul style="list-style-type: none"> ● 馴化作業がいい。ただ猫を譲渡するのではなく、人と猫と海鳥が共生する環境のためにどうすればいいかが分かりやすい。[2] ● 大学や企業(ホームセンター)の巻き込みがよい。関係をつくったことで周知効果が大きかった。[2] ● 地域で連携したよい取り組み。類似課題を抱える他の島の活動へぜひ発信共有を。[2] | | |
| | 協働 | <p>開始時の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「イエネコにとっても必ずしも良い生活環境ではない」に納得。[2] <p>運営制度の設計</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 仕組みがおもしろい。馴化して譲渡、さらに天売猫のふるさとへという切符が観光振興にもつながっている。[2] ● 多様なステークホルダーの巻き込み。[2] <p>協働のプロセス</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 馴化作業がいい。ただ猫を譲渡するのではなく、人と猫と海鳥が共生する環境のためにどうすればいいかが分かりやすい。[2] ● 即「駆除」に頼らないで「馴化」という落としどころを共有したこと。[2] | | |
| [3] 三素 | 事業 | 効率性 | <ul style="list-style-type: none"> ● 環境団体だけではなく、スローフードを推進する団体も前面に立っていることの魅力と可能性。[3] ● 専門家、三素、村内調整、他団体による役割分担がしっかり、はっきりしている。[3] | |
| | | 効果／目標達成度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 協働事例を他の地域で進めたところがすごい。[3] ● 富良野で培ったノウハウをただ転用するのではなく、地元団体と互いに育成しながら行っていること。[3] | |
| | | 計画妥当性 | <ul style="list-style-type: none"> ● 災害対策と電源開発を合わせて行う取組の協働に共感。今後重要になる。[3] ● 自然エネルギー発電いい。[3] | |
| | | 関係主体の巻込度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 地域へアプローチしているところがいい。[3] ● 企業のかかわり方がいい。[3] ● 環境負荷なども含めて、住民と一緒に今後のことを考えること。[3] | |
| | | 関係主体の満足度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 地域に根ざすことで推進力アップにつながる。[3] | |
| | | 社会的インパクト | <ul style="list-style-type: none"> ● 富良野で培ったノウハウをただ転用するのではなく、地元団体と互いに育成しながら行っていること。[3] ● 小水力発電はともてもいい。ツールとして、もっと同じような環境にある市町村他でワークショップをされては。[3] | |
| | 協働 | 自立発展性 | <ul style="list-style-type: none"> ● 富良野で培ったノウハウをただ転用するのではなく、地元団体と互いに育成しながら行っていること。[3] ● 小水力発電はともてもいい。ツールとして、もっと同じような環境にある市町村他でワークショップをされては。[3] | |
| | | 開始時の状況 | <ul style="list-style-type: none"> ● エネルギー利用の目的が明確。[3] | |
| | | 運営制度の設計 | <ul style="list-style-type: none"> ● 行政の人も一村民としてフラットに話し合える場づくり。[3] ● 専門家、三素、村内調整、他団体による役割分担がしっかり、はっきりしている。[3] | |
| | [4] あきた地球環境会議 | 事業 | 協働のプロセス | <ul style="list-style-type: none"> ● 富良野で培ったノウハウをただ転用するのではなく、地元団体と互いに育成しながら行っている。[3] ● 調整を行う「間に立てる団体」があった。[3] |
| | | | 効率性 | <ul style="list-style-type: none"> ● たくさんの異なる立場の人、組織が関わっている。[4] ● 若者が中心に参加するプロジェクトってうらやましい。[4] |
| | | | 効果／目標達成度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 地域課題と環境のコラボがいい。収支がシンプルそうで事業化の実現度高そう。[4] ● 就業者のモチベーションアップにより事業改善につながる。[4] ● 訓練者の方自身が楽しく参加、理解、学ぶ取り組みに賛成。[4] ● 仕事は人間の大切な時間の使い方のひとつであり、誰もが働く喜びを感じられるようになることはよい。[4] ● 訓練者の方が社会貢献になっているという意識を持って積極的に取り組んでいること。[4] |
| | | | 計画妥当性 | <ul style="list-style-type: none"> ● 地域課題と環境のコラボがいい。収支がシンプルそうで事業化の実現度高そう。[4] |

| | | |
|--------------|---|--|
| 協働 | | <ul style="list-style-type: none"> ● 2つの課題を掛け合わせて新しい課題を作るというアイデアが新鮮。[4] ● 課題×課題でブレイクスルー発想がうまれる。[4] ● 「引きこもり対策」→社会復帰×「林業活性化」この両方の社会問題を協働取組したアイデアはユニーク。共感が得られると思う。学校での環境教育に結び付けることで引きこもりも減少すると思う。[4] ● 地域課題と環境問題を組み合わせたのは非常に良いです。[4] ● 社会課題×社会課題→円と円の重なり部分！というのが発見の視点。[4] ● 10%の引きこもりに驚き。やはり仕事の手が必要。[4] ● 中山間地での拡大可能性。[4] ● 課題(引きこもり)×課題(未利用材)＝解決(地域活性化)というロジックで課題ごとのアプローチ、ゴールイメージが共有できている。[4] |
| | 関係主体の巻込度 | <ul style="list-style-type: none"> ● たくさんの異なる立場の人、組織が関わっている。[4] ● 異分野の各課題解決、これぞ協働のタネ。[4] ● 課題×課題＝ブレイクスルー。[4] ● 異なる分野の主体が連携、顔を合わせて話をする。[4] |
| | 関係主体の満足度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 異業界の内容をていねいに理解して活動を展開したこと。[4] |
| | 社会的インパクト | <ul style="list-style-type: none"> ● 10%の引きこもりに驚き。やはり仕事の手が必要。[4] ● 環境と福祉の連携は他都市でも応用しやすい。「顔合わせ」「やる気」参考になる。[4] ● 中山間地での拡大可能性。[4] ● 就労支援が社会貢献につながる。[4] ● 仕事は人間の大切な時間の使い方のひとつであり、誰もが働く喜びを感じられるようになることはよい。[4] ● 訓練者の方が社会貢献になっているという意識を持って積極的に取り組んでいること。[4] |
| | 自立発展性 | <ul style="list-style-type: none"> ● 訓練者のコミュニケーション力の向上につなげている。[4] ● 本取組が経済循環や公共利益と連動して役割分担が明確、有効となった。[4] ● ソーシャルビジネス化できている点が素晴らしい。[4] |
| | 開始時の状況 | <ul style="list-style-type: none"> ● |
| | 運営制度の設計 | <ul style="list-style-type: none"> ● 異分野の各課題解決、これぞ協働のタネ。[4] ● 参加者主体で進んでいる。[4] ● 地域の方や産業への一つ一つマメな誘いがけ行動。[4] |
| | 協働のプロセス | <ul style="list-style-type: none"> ● 環境と福祉の連携は他都市でも応用しやすい。「顔合わせ」「やる気」参考になる。[4] ● 社会課題を共有したプロセス。[4] ● 「リーダーシップ」を引き出す必要性への気づきがいい。帰属意識プラス積極性の醸成。[4] ● 異業界の内容をていねいに理解して活動を展開したこと。[4] ● 異なる分野の主体が連携、顔を合わせて話をする。[4] ● 課題(引きこもり)×課題(未利用材)＝解決(地域活性化)というロジックで課題ごとのアプローチ、ゴールイメージが共有できている。[4] |
| | 効率性 | <ul style="list-style-type: none"> ● 地域発のプロジェクト。[5] |
| | 効果／目標達成度 | <ul style="list-style-type: none"> ● エタノール→せっけん→エサ→卵お菓子。地域外から来てもらうところにつなげたところがすごい。[5] ● 地域でシンボリックなエタノール化が“アイコン”になっている。[5] ● 商品・サービス開発が地域密着ですすんでいるところ。[5] ● 生産者の平時の事業の中で協働が成立している。[5] |
| 計画妥当性 | <ul style="list-style-type: none"> ● ピンチが仕組み作りのチャンスになったことがいい。[5] ● 食べることで地域循環の仕組み。[5] ● 景観を守るがベースにあつての循環型の農業、そのしゅみがか素晴らしい。[5] ● 「風景を守る」に共感する。[5] ● ゴミが出ない農業→普遍性があり新鮮。[5] | |
| 関係主体の巻込度 | <ul style="list-style-type: none"> ● ツアーを通して地域外とつながるのはよい。[5] ● 他地域を巻き込んだ協働。[5] ● ツーリズムの他地域の巻き込み方。[5] ● 誰でもできる取組であることがいい。[5] | |
| 関係主体の満足度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 農家主体による六次産業化。[5] | |
| 社会的インパクト | <ul style="list-style-type: none"> ● 散居集落ポテンシャルがすごい。[5] ● みんなで楽しいまちにしようという方向性での食べるワークショップが分かりやすい。[5] ● 協働取組と実業(糧)とがつながった取組であり、説得力がある。[5] ● 商品・サービス開発が地域密着ですすんでいるところ。[5] | |
| [5] マイムマイム奥州 | 事業 | |

| | | | |
|-------------|----|----------|--|
| | | | <ul style="list-style-type: none"> ● 休耕田の解消から米、養鶏、エタノールなどの生産という好循環の事業なので、他地域にも広げてもらいたい。[5] |
| | | 自立発展性 | <ul style="list-style-type: none"> ● 思いが整理されている。[5] ● 誰でもできる取組であることがいい。[5] ● 地域循環→これを地域ブランドにしていく可能性が広がりを感じる。[5] ● 協働性→広がり性があるとくみ。[5] ● 楽しい循環のしくみがいい。[5] ● 地域の方がはじめた事業であることがいい。循環が継続することで事業にも継続性が生まれそう。[5] ● 地域資源の理想的な循環が図られていていい。[5] ● 協働取組と実業(糧)とがつながった取組であり、説得力がある。[5] ● 生産者の平時の事業の中で協働が成立している。[5] ● 取組を進めることで地域の方々が自分達の地域を知るきっかけになっている。[5] ● 協働により横のつながりが生まれ、地域の特性の発信が実現。[5] |
| | | 開始時の状況 | <ul style="list-style-type: none"> ● 地域発のプロジェクト。[5] ● 地域の方がはじめた事業であることがいい。循環が継続することで事業にも継続性が生まれそう。[5] |
| | | 運営制度の設計 | <ul style="list-style-type: none"> ● 誰でもできる取組であることがいい。[5] |
| | | 協働のプロセス | <ul style="list-style-type: none"> ● 協働取組と実業(糧)とがつながった取組であり、説得力がある。[5] ● 思いを整理して伝えられるようになってきたこと。[5] ● 生産者の平時の事業の中で協働が成立している。[5] ● 伝えること、役割分担、大事。[5] ● 協働により横のつながりが生まれ、地域の特性の発信が実現。[5] ● 楽しい循環のしくみがいい。 |
| [6] オイスカ | 事業 | 効率性 | <ul style="list-style-type: none"> ● Action First.としてまず動くことは見習いたい。[6] ● 行政が苦手な「まずやってみる」ができる。[6] ● ボランティアの活用がいい。[6] ● 専門的技術、知識の導入はさすがオイスカ。[6] ● 調査ボランティアとして200人集めた。[6] |
| | | 効果／目標達成度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 周囲の自治体との差別化として食べ物を打ち出すのもいい。[6] ● 魅力的な森で、企業へのアピールができる点がうらやましい。[6] |
| | | 計画妥当性 | <ul style="list-style-type: none"> ● 調査活動の受け入れ態勢が出来上がっているのがすごい。[6] ● 周囲の自治体との差別化として食べ物を打ち出すのもいい。[6] ● 次の世代に引き継ぐというコンセプトがいい。[6] ● 自然関係を上手く体験できる仕組みづくり。食＝調査。[6] ● 上手い魚で胃袋をつかみ、リピーターを確保するのはいい。お金ではない。[6] |
| | | 関係主体の巻込度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 体験してもらって巻き込んでいく手法。[6] ● 文化の伝承と環境保全という視点がいい。[6] ● 活動実践をして引き込んでいったところがすごい。[6] ● 地域の巻き込みもいい。[6] |
| | | 関係主体の満足度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 自然関係を上手く体験できる仕組みづくり。食＝調査。[6] ● 関係者にとって良い経験を生み出している。[6] ● 350年の森行ってみたい。ボランティアの調査！いいと思う！[6] ● 地元参加者の巻き込みが上手。オイスカのノウハウが活かされている。学びが多そう。[6] ● 「魚」との関係性でつながる。[6] ● 上手い魚で胃袋をつかみ、リピーターを確保するのはいい。お金ではない。[6] |
| | | 社会的インパクト | <ul style="list-style-type: none"> ● 文化財、自然資源保全モデルで役立ちそう。[6] |
| | | 自立発展性 | <ul style="list-style-type: none"> ● |
| | | 開始時の状況 | <ul style="list-style-type: none"> ● |
| | | 運営制度の設計 | <ul style="list-style-type: none"> ● 自然関係を上手く体験できる仕組みづくり。[6] ● 継続的にボランティアを引きつけるには胃袋をつかむ。[6] |
| | | 協働のプロセス | <ul style="list-style-type: none"> ● 関係者にとって良い経験を生み出している。[6] ● 次の世代に引き継ぐというコンセプトがいい。[6] |
| [7] さがみ湖 | 事業 | 効率性 | <ul style="list-style-type: none"> ● |
| | | 効果／目標達成度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 可視化への着目がいい。[7] ● 川上、川中、川下の話をよく聴き、ニーズを把握している。そして「森の机事業」のような分かりやすい提案がいい。[7] ● 小学校を巻き込むこと。環境教育につながる点でいいと思った。[7] |

| | | | |
|------------|--------------|---|---|
| 森・モノづくり研究所 | 協働 | | <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちへのアプローチがいい。[7] |
| | | 計画妥当性 | <ul style="list-style-type: none"> 川上、川中、川下の話をよく聴き、ニーズを把握している。そして「森の机事業」のような分かりやすい提案がいい。[7] 森の机事業が事業としておもしろい。[7] くすぶっていた公共課題のあぶり出し。[7] 「ない→ある」へのシンプルなスタイルがいい。[7] ピンチ→チャンスがいい。[7] |
| | | 関係主体の巻込度 | <ul style="list-style-type: none"> 調整しすぎず、見守るという姿勢がいい。[7] 聞く「だけ」という行為。ふわっと、ゆるっと、がすごい。[7] 多様性をすごく感じる。[7] 丁寧なヒアリング(情報把握)から実施の流れ。[7] たくさんの方のステークホルダーがポイント。予想以上でも受け入れるところ。[7] ふとこの広さ。[7] サプライチェーンを通じた連携・協働のかたち。[7] |
| | | 関係主体の満足度 | <ul style="list-style-type: none"> 各主体の「知らない」を「知る」「つながる」に展開できた(マッチング)こと。[7] 知る、つながる、すごく大切です。[7] 川上⇄川中⇄川下をうまくつなげたこと(それを引き出したこと)。[7] |
| | | 社会的インパクト | <ul style="list-style-type: none"> |
| | | 自立発展性 | <ul style="list-style-type: none"> 「森を守る＝山主にお金を落とす」がポイント。地域でまわすということ。[7] 過密と過疎、森林資源と大工などについての域内経済循環。[7] |
| | 開始時の状況 | <ul style="list-style-type: none"> 森林関係者、製造者、市民、行政などから、なぜ木材の活用が活性しないかヒアリングしたこと。[7] | |
| | 運営制度の設計 | <ul style="list-style-type: none"> ふとこの広さ。[7] たくさんの方のステークホルダーがポイント。予想以上でも受け入れるところ。[7] やる気をワーキンググループに落とし込んだこと。[7] | |
| | 協働のプロセス | <ul style="list-style-type: none"> 川上、川中、川下の話をよく聴き、ニーズを把握している。そして「森の机事業」のような分かりやすい提案がいい。[7] 聞く「だけ」という行為。ふわっと、ゆるっと、がすごい。[7] くすぶっていた公共課題のあぶり出し。[7] 丁寧なヒアリング(情報把握)から実施の流れ。[7] 各主体の「知らない」を「知る」「つながる」に展開できた(マッチング)こと。[7] 知る、つながる、すごく大切です。[7] 調整しすぎず、見守るという姿勢がいい。[7] | |
| | [8] 若狭高浜観光協会 | 事業 | 効率性 |
| 効果／目標達成度 | | | <ul style="list-style-type: none"> 「ビーチカルチャー」という間口の広さ。[8] 犬の散歩について折衷案の交渉をしたこと。[8] 行政職員やステークホルダーの頭の改革。[8] |
| 計画妥当性 | | | <ul style="list-style-type: none"> 環境課題を観光と地域マネジメントからアプローチしたのがいい。[8] 「課題」をステップ踏んでビジョン(BF)にもっていったこと。[8] 具体的なブルーフラッグを目標にしたところがよい。[8] ブルーフラッグ認証を活用しようとしたこと。[8] “認証”を取ろうという誰からも分かりやすい目標設定がよい。[8] いろいろな人の「こうなったらいいな」の上手な結びつけ。[8] |
| 関係主体の巻込度 | | | <ul style="list-style-type: none"> 他分野の人の思いが活動の推進力になっている。[8] 地域との対話・連携があるのはいい。[8] ステークホルダーを個別にあたることで集めた。[8] いろいろな人の「こうなったらいいな」の上手な結びつけ。[8] 多様なステークホルダーを巻き込んだ体制づくりができていい。[8] |
| 関係主体の満足度 | | | <ul style="list-style-type: none"> 他分野の人の思いが活動の推進力になっている。[8] 地域との対話・連携があるのはいい。[8] |
| 社会的インパクト | | | <ul style="list-style-type: none"> 教育にまで広がりを見たこと。[8] |
| 自立発展性 | | | <ul style="list-style-type: none"> 行政主導だったが、主体的な市民が出てきた。[8] 事務局を支える担い手が出てきた。[8] |
| 協働 | | 開始時の状況 | <ul style="list-style-type: none"> 具体的なブルーフラッグを目標にしたところがよい。[8] |
| | | 運営制度の設計 | <ul style="list-style-type: none"> 「ビーチカルチャー」という間口の広さ。[8] ステークホルダーを個別にあたることで集めた。[8] ブルーフラッグ認証を活用しようとしたこと。[8] |

| | | | |
|------------------------------|---------|--|--|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ● “認証”を取ろうという誰からも分かりやすい目標設定がよい。[8] ● 多様なステークホルダーを巻き込んでの体制づくりができていい。[8] | |
| | 協働のプロセス | <ul style="list-style-type: none"> ● 犬の散歩について折衷案の交渉をしたこと。[8] ● 行政主導だったが、主体的な市民が出てきた。[8] ● 「課題」をステップ踏んでビジョン(BF)にもっていったこと。[8] ● いろんな人の「こうなったらいいな」の上手な結びつけ。[8] ● 「いいこと」に対して、どう参加させ、やる気にさせるか。[8] ● 環境課題を観光と地域マネジメントからアプローチしたのがいい。[8] | |
| [9] 中部 リサイクル 運動市民の会 | 事業 | 効率性 | ● リユースびんを酒にしぼったところがよい。まわりやすい。[9] |
| | | 効果／目標達成度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 私たちの地域にもあったらいいのと思った。[9] ● 取り組みの経済的なメリットを専門家から示したところ。[9] ● メリットを明示するという方向性がよい。[9] ● 定量的な事実の共有。[9] ● 見せる人の存在により、思いだけでなく、客観性が担保できるのはいい。[9] ● 見せる人を入れて、見せ方を上手くし成功したこと。[9] |
| | | 計画妥当性 | <ul style="list-style-type: none"> ● これまで活用(着目)されていない日本酒へのアプローチがいい。[9] ● リサイクルよりリユースに納得。[9] ● 課題と解決策が明解。[9] ● “市の政策”というゴールとその共有。[9] |
| | | 関係主体の巻込度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 参加者が増え、地域のしくみとして広がってきた。[9] ● オープン型の巻き込み。[9] ● 見せる人と経済評論家をステークホルダーに加えたこと。[9] ● 地域の意思決定者の巻き込み。[9] ● マテリアルフローの整理とステークホルダーの巻き込み。[9] ● ステークホルダーの視点に立った団体・有識者の巻き込み。[9] |
| | | 関係主体の満足度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 参加者が増え、地域のしくみとして広がってきた。[9] ● メリットを明示するという方向性がよい。[9] ● 定量的な事実の共有。[9] |
| | | 社会的インパクト | <ul style="list-style-type: none"> ● “市の政策”に反映された。[9] ● “市の政策”への反映は他の活動への大きな参考モデル。[9] ● リユースが進むことで、製造の段階からゴミが出なくなる。[9] |
| | | 自立発展性 | ● “市の政策”への反映は他の活動への大きな参考モデル。[9] |
| | 開始時の状況 | ● | |
| | 協働 | 運営制度の設計 | <ul style="list-style-type: none"> ● 取り組みの経済的なメリットを専門家から示したところ。[9] ● 見せる人の存在により、思いだけでなく、客観性が担保できるのはいい。[9] ● “市の政策”というゴール(政策協働)とその共有。[9] ● ステークホルダーの視点に立った団体・有識者の巻き込み。[9] |
| | | 協働のプロセス | ● マテリアルフローの整理とステークホルダーの巻き込み。[9] |
| [10] 吉野川 紀の川 源流物語 | 事業 | 効率性 | <ul style="list-style-type: none"> ● 地域おこし協力隊の役割を活かして、広域行政の連携がとれている。[10] ● 農家から見て漁師がチームに入ったことは大きかった。[10] ● 多様な主体へのヒアリング、ワークショップ、雑談からよいアイデアが生まれる。[10] |
| | | 効果／目標達成度 | <ul style="list-style-type: none"> ● ESDが広がり、会話の中に出て来る。[10] ● 形式的な流域協議会から動く役割を持たせた。[10] |
| | | 計画妥当性 | <ul style="list-style-type: none"> ● 形式的な流域協議会から動く役割を持たせた。[10] ● 紀の川／県境を越えた直接の自治体間連携。(流域視点)[10] ● 体験など行動ベースのものがプログラムに組み込まれているところがいい。[10] |
| | | 関係主体の巻込度 | <ul style="list-style-type: none"> ● トップダウンとボトムアップの組み合わせを基調としていること。[10] ● 異分野の接点づくり。[10] ● 様々な人々の話しあい。[10] ● 農家から見て漁師がチームに入ったことは大きかった。[10] ● 人と話す対話から事業へつなげているところがいい。[10] ● 紀の川／県境を越えた直接の自治体間連携。(流域視点)[10] ● 多様な立場の人との対話・コミュニケーション。[10] ● メンバーの多様性と対話。[10] |
| | | 関係主体の満足度 | ● 非常に広範なエリアをカバーし、取り組み、合意形成に結びつけられたのは、簡単ではない。[10] |
| | | 社会的インパクト | <ul style="list-style-type: none"> ● ESDという言葉を一語一般化しようとしたとくみはすごい。[10] ● 行政区を越えた流域で取り組むことは他地域の参考になる。相模原市の取組も生産か |

| | | | |
|-------------------------------|----|----------|---|
| | | | <p>ら販売までのサプライチェーン構築には、行政区をこえた「流域による」取り組みが重要。[10]</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 協議会からはじまり息の長い取組に感嘆。そのさらなる再生ということで今後も注目したい。[10] ● 真の流域連盟 良い言葉。[10] ● 流域視点のつながりが興味深い。[10] |
| | | 自立発展性 | <ul style="list-style-type: none"> ● スタートアップから地域主体行動へのプロセスは優良モデル。[10] ● 各主体が既存の活動の延長で無理なく動けること。[10] |
| | | 協働 | <p>開始時の状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ● <p>運営制度の設計</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 気軽に話し合う機会の活用。[10] ● トップダウンとボトムアップの組み合わせを基調としていること。[10] ● 紀の川／県境を越えた直接の自治体間連携。(流域視点)[10] ● 各主体が既存の活動の延長で無理なく動けること。[10] ● 多様な立場の人との対話・コミュニケーション。[10] ● メンバーの多様性と対話。[10] <p>協働のプロセス</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 一緒に現地を見に行ったことがいい。[10] ● 多様な主体へのヒアリング、ワークショップ、雑談からよいアイデアが生まれる。[10] ● 非常に広範なエリアをカバーし、取り組み、合意形成に結びつけられたのは、簡単ではない。[10] ● 協議会からはじまり息の長い取組に感嘆。そのさらなる再生ということで今後も注目したい。[10] ● 雑談から事業が生まれる。[10] |
| | | | |
| [11] bioa | 事業 | 効率性 | ● 人集めがいい。[11] |
| | | 効果／目標達成度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 現場の実践とともに、これを支える基盤をつくられていること。(政策協働)[11] ● 年間実施までこぎつけられたこと[11] |
| | | 計画妥当性 | ● |
| | | 関係主体の巻込度 | ● |
| | | 関係主体の満足度 | ● 社会資源を対話でつなぐところがいい。[11] |
| | | 社会的インパクト | ● 環境教育として充実した内容となっているのがいい。[11] |
| | | 自立発展性 | ● 行政とNPO がつながる協働体。[11] |
| | 協働 | 開始時の状況 | ● |
| | | 運営制度の設計 | <ul style="list-style-type: none"> ● 社会資源を対話でつなぐところがいい。[11] ● 熱意を新たな役割につなげたところ。[11] ● 行政とNPO がつながる協働体。[11] |
| | | 協働のプロセス | ● 行政とNPO がつながる協働体。[11] |
| [12] アン ダン テ 21 | 事業 | 効率性 | ● 参加者の多さ。[12] |
| | | 効果／目標達成度 | ● 地域が参加している現況把握調査がいい。[12] |
| | | 計画妥当性 | ● 市民セクターを 2 つに分けられたのが興味深い。議員の巻き込みを可能としたのがいい。[12] |
| | | 関係主体の巻込度 | <ul style="list-style-type: none"> ● ステークホルダーの掘り起し。[12] ● 地域が参加している現況把握調査がいい。[12] ● 益田川の関心を住民に持たせることから、議会等を巻き込めたこと。[12] |
| | | 関係主体の満足度 | ● 市民セクターを 2 つに分けられたのが興味深い。議員の巻き込みを可能としたのがいい。[12] |
| | | 社会的インパクト | ● 参加者の多さ。[12] |
| | | 自立発展性 | ● 様々な手法の組み合わせにより、関心喚起や参加を広げていること。[12] |
| | 協働 | 開始時の状況 | ● ステークホルダーの掘り起し。[12] |
| | | 運営制度の設計 | ● 市民セクターを 2 つに分けられたのが興味深い。議員の巻き込みを可能としたのがいい。[12] |
| | | 協働のプロセス | <ul style="list-style-type: none"> ● 住民との対話、対応を丁寧に行っていること。[12] ● 地域が参加している現況把握調査がいい。[12] ● 益田川の関心を住民に持たせることから、議会等を巻き込めたこと。[12] |
| [13] み ず し ま 財 | 事業 | 効率性 | ● |
| | | 効果／目標達成度 | ● 将来のまちづくりを担う子ども、若者の巻き込みに成功したのが最大の成果ではないか。[13] |
| | | 計画妥当性 | <ul style="list-style-type: none"> ● 明確なビジョンがいいです。目標があれば協働できるステークホルダーは広がると思います。[13] ● 難しい公害問題にソフトな「環境教育」というアプローチは、着実に「若者」へ拡大して |

| | | | | |
|----------|--------------|--|---|--|
| 団 | 協働 | | いる。[13] | |
| | | 関係主体の巻込度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 場をはじめに作った。[13] ● 将来のまちづくりを担う子ども、若者の巻き込みに成功したのが最大の成果ではないか。[13] ● バイクビズみずしまなどを通した子どもたちの意見の取り込み。[13] ● 地域、まちづくりにつながる「若者」が元気がいい。[13] ● 明確なビジョンがいい。目標があれば協働できるステークホルダーは広がる。[13] ● 難しい公害問題にソフトな「環境教育」というアプローチは、着実に「若者」へ拡大している。[13] | |
| | | 関係主体の満足度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 対話を通した地域との取組がいい。[13] | |
| | | 社会的インパクト | <ul style="list-style-type: none"> ● 広く関心を持ってもらうためのわかりやすいイラストパンフの作成。[13] ● 地域ブランド的なビジョンづくりとなっていること。[13] | |
| | | 自立発展性 | <ul style="list-style-type: none"> ● 協働も参加の広がりも着実に進んでいる様子。[13] ● 地域ブランド的なビジョンづくりとなっていること。[13] | |
| | 開始時の状況 | <ul style="list-style-type: none"> ● | | |
| | 運営制度の設計 | <ul style="list-style-type: none"> ● 場をはじめに作ったこと。[13] ● 対話を通した地域との取組がいい。[13] ● 明確なビジョンがいい。目標があれば協働できるステークホルダーは広がる。[13] | | |
| | 協働のプロセス | <ul style="list-style-type: none"> ● バイクビズみずしまなどを通した子どもたちの意見の取り込み。[13] ● 協働も参加の広がりも着実に進んでいる。[13] ● 対話を通した地域との取組がいい。[13] ● 将来のまちづくりを担う子ども、若者の巻き込みに成功したのが最大の成果ではないか。[13] ● 地域、まちづくりにつながる「若者」が元気がいい。[13] ● 難しい公害問題にソフトな「環境教育」というアプローチは、着実に「若者」へ拡大している。[13] ● 広く関心を持ってもらうためのわかりやすいイラストパンフの作成。[13] | | |
| | [14] 森からつづく道 | 事業 | 効率性 | <ul style="list-style-type: none"> ● 高齢化した団体との連携が、活動への信頼を生んだ。[14] ● 地元の人に「話をしてもらう」のが上手。[14] ● 団体の構成員の年齢層がバラエティに富んでいること。[14] ● 生物多様性「トコロジスト」を活用することで多様な主体が参加した。[14] |
| | | | 効果／目標達成度 | <ul style="list-style-type: none"> ● ごみ問題と循環型農業を結びつけて、農家にインプットした。[14] ● 耕作放棄地×生物多様性の二つのテーマについて、時間をかけて関連付けたことで市内部での連携がすすんだ。[14] |
| 計画妥当性 | | | <ul style="list-style-type: none"> ● 「トコロジスト」という言葉・概念を導入したことで一体感をも持った。[14] ● 生物多様性「トコロジスト」を活用することで多様な主体が参加した。[14] ● 「地域の魅力」から「農業」→「環境」への拡大アプローチは優れている。[14] | |
| 関係主体の巻込度 | | | <ul style="list-style-type: none"> ● 地元の人に「話をしてもらう」のが上手。[14] ● ステークホルダーごとに価値を説いた。[14] ● 楽しく活動できるためのステークホルダー選びがなされている。[14] ● ごみ問題と循環型農業を結びつけて、農家にインプットした。[14] ● 時間を共有することが、団体と市の信頼関係に結びついた。[14] ● 高齢化した団体との連携が、活動への信頼を生んだ。[14] ● 機運が高まるベース作りになった。[14] | |
| 関係主体の満足度 | | | <ul style="list-style-type: none"> ● いきなりではイメージしづらいものもイベントなどを回数こなすことで、イメージが湧くだけでなく主体性が生まれた[14] | |
| 社会的インパクト | | <ul style="list-style-type: none"> ● 課題・解決策、方向性も良好。[14] | | |
| 自立発展性 | | <ul style="list-style-type: none"> ● | | |
| 開始時の状況 | | <ul style="list-style-type: none"> ● 事業提案から生まれる協働がいい。[14] ● 高齢化した団体との連携が、活動への信頼を生んだ。[14] | | |
| 運営制度の設計 | | <ul style="list-style-type: none"> ● 楽しく活動できるためのステークホルダー選びがなされている。[14] ● 社会学習施設との線引きについて、気をつけた。[14] ● 時間を共有することが、団体と市の信頼関係に結びついた。[14] ● 機運が高まるベース作りになった。[14] | | |
| 協働のプロセス | | <ul style="list-style-type: none"> ● 時間を共有することが、団体と市の信頼関係に結びついた。[14] ● ステークホルダーごとに価値を説いた。[14] ● いきなりではイメージしづらいものもイベントなどを回数こなすことで、イメージが湧くだけでなく主体性が生まれた。[14] | | |

| | | | |
|--|----|----------|---|
| [15] 環境の 社 こ う ち | 事業 | 効率性 | ● |
| | | 効果／目標達成度 | ● 子どもをつなげる交流がいい。[15] |
| | | 計画妥当性 | ● 環境教育のマッピングシステムがいい。[15] |
| | | 関係主体の巻込度 | ● 広域的な3市連携の仕組み。[15] ● 「教育委員会」を動かせたのはいい。[15] ● 温暖化防止活動推進員の巻き込み。[15] |
| | | 関係主体の満足度 | ● |
| | | 社会的インパクト | ● 情報発信をメディアと組んで進めたこと。[15] ● マスコミ(CATV)を入れたことはいい。[15] |
| | | 自立発展性 | ● |
| | 協働 | 開始時の状況 | ● |
| | | 運営制度の設計 | ● ステークホルダーの文化の違いを理解すること。[15] ● 話し合う関係性ができたことがいい。[15] ● 広域的な3市連携の仕組み。[15] ● 「教育委員会」を動かせたのはいい。[15] ● 温暖化防止活動推進員の巻き込み。[15] |
| | | 協働のプロセス | ● ステークホルダーの文化の違いを理解すること。[15] ● 話し合う関係性ができたことがいい。[15] |
| [16] おきな な わ グ リ ン ネ ッ ト ワ ー ク | 事業 | 効率性 | ● 専門家を含め主要なステークホルダーをすべて巻き込んでいる。[16] |
| | | 効果／目標達成度 | ● (農地に由来する赤土問題の)メカニズムがわかりやすい。[16] ● 研究機関との連携によるデータの可視化。[16] ● 成果の見える化がよい。[16] |
| | | 計画妥当性 | ● 研究機関との連携によるデータの可視化。[16] ● 成果の見える化がよい。[16] ● ソーシャルビジネス化を取り入れて持続可能に。[16] ● 継続に向けた持続可能な取組を検討している。[16] ● 先の目標ができています。[16] |
| | | 関係主体の巻込度 | ● ピラミッド型連携から円形(横連携)に発展し機能しているのがすばらしい。[16] ● 地域に根ざした活動がいい。[16] ● ステークホルダーが多様。[16] ● 専門家を含め主要なステークホルダーをすべて巻き込んでいる。[16] ● JAと県漁連のつながりを作った。[16] ● NPOと農家をつなぐコーディネーターの存在が鍵。[16] ● 課題関係者以外を巻き込んだ取組がいい(アロマオイルなど)。[16] ● 地域の方との膝詰めの対話(交流会の開催など)。[16] |
| | | 関係主体の満足度 | ● 多様なツールでステークホルダーを巻き込む戦略がすばらしい。[16] ● 各主体のメリットを共有するための工夫は大切。[16] ● 課題関係者以外を巻き込んだ取組がいい。(アロマオイルなど)[16] |
| | | 社会的インパクト | ● 相談窓口としての役割。[16] ● JAと県漁連のつながりを作った。[16] |
| | | 自立発展性 | ● 地域の農業の問題(赤土対策)→地域住民全体で取り組む→協働のメリットを発見→円環連携→それぞれの役割が明確。[16] ● ソーシャルビジネス化を取り入れて持続可能に。[16] ● 継続に向けた持続可能な取組を検討している。[16] ● 先の目標ができています。[16] |
| | 協働 | 開始時の状況 | ● 実績を積み上げているからこそ、地域外の団体にもかかわらず、地元の人からの信頼を得ている。[16] |
| | | 運営制度の設計 | ● ステークホルダーが多様。[16] ● 対話がいい。[16] ● 専門家を含め主要なステークホルダーをすべて巻き込んでいる。[16] ● 課題関係者以外を巻き込んだ取組がすごい(アロマオイルなど)。[16] ● 多様なツールでステークホルダーを巻き込む戦略がすばらしい。[16] ● 各主体のメリットを共有するための工夫は大切。[16] |
| | | 協働のプロセス | ● 地域の農業の問題(赤土対策)→地域住民全体で取り組む→協働のメリットを発見→円環連携→それぞれの役割が明確。[16] ● 強みを生かす関係づくりから信頼関係が生まれる、というプロセス。[16] ● ステークホルダーの成長がいい。[16] ● NPOと農家をつなぐコーディネーターの存在が鍵。[16] |

| | | | |
|-----------------|----|--|--|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ● 課題関係者以外を巻き込んだ取組がいい。(アロマオイルなど)[16] ● 地域の方との膝詰めの対話(交流会の開催など)。[16] | |
| [17] くすの木自然館 | 事業 | 効率性 | <ul style="list-style-type: none"> ● 首長のバックアップがいい。[17] ● 団体内部の役割分担も大切。[17] |
| | | 効果／目標達成度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 環境保全指標(協働のシンボル)としてのクロツラヘラサギの有効活用。[17] ● 主体者だけでなく、関係することによる意識付けやブランド化。[17] |
| | | 計画妥当性 | <ul style="list-style-type: none"> ● 課題、解決策、目的が明確。[17] ● 協働の取組を細分化しつつ、大きい枠を設ける仕組みとハンドリングがよい。[17] |
| | | 関係主体の巻込度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 組織の強みを活かす場のプロデュースが巧み。[17] ● 地域住民と活動しているところがいい。[17] ● 国、県、市と多様な行政がつながっている。[17] ● 自治会のネットワークにより協働が広がった。さらに新しい自治会がネットワークに加わる流れになった。[17] |
| | | 関係主体の満足度 | <ul style="list-style-type: none"> ● 地元の小学校から環境学習の要望があったこと。[17] ● 自治会の人たちの意識を変えたことはすごい。[17] ● マイクロパートナーシップによる目的意識の変化[17] ● マイクロパートナーシップによる当事者意識の変化。[17] ● 湿地の保全をとおして地域への愛着が高まった。[17] |
| | | 社会的インパクト | <ul style="list-style-type: none"> ● 湿地の保全をとおして地域への愛着が高まった。[17] ● 自治会の人たちの意識を変えたことはすごい。[17] |
| | | 自立発展性 | <ul style="list-style-type: none"> ● マイクロパートナーシップによる当事者意識の変化。[17] ● 湿地の保全をとおして地域への愛着が高まった。[17] |
| | 協働 | 開始時の状況 | <ul style="list-style-type: none"> ● 自治会のネットワークにより協働が広がった。さらに新しい自治会がネットワークに加わる流れになった。[17] ● NPOと住民の信頼関係。[17] |
| | | 運営制度の設計 | <ul style="list-style-type: none"> ● 組織の強みを活かす場のプロデュースが巧み。[17] ● 対話の場づくりがいい。[17] ● 団体内部の役割分担も大切。[17] |
| | | 協働のプロセス | <ul style="list-style-type: none"> ● 協働の取組を細分化しつつ、大きい枠を設ける仕組みとハンドリングがよい[17] ● 自治会のネットワークにより協働が広がった。さらに新しい自治会がネットワークに加わる流れになった。[17] ● マイクロパートナーシップによる目的意識の変化。[17] ● マイクロパートナーシップによる当事者意識の変化。[17] ● 湿地の保全をとおして地域への愛着が高まった。[17] |

[1]公害資料館ネットワーク／[2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会／[3](有)三素／[4](一社)あきた地球環境会議／[5]♪米 im♪My 夢♪Oshu(マイムマイム奥州)／[6](公財)オイスカ／[7]さがみ湖森・モノづくり研究所／[8](一社)若狭高浜観光協会／[9](特活)中部リサイクル運動市民の会／[10](公財)吉野川紀の川源流物語／[11] bioa(ビオア)／[12](特活)アンダンテ 21／[13](公財)水島地域環境再生財団(みずしま財団)／[14]NPO 森からつづく道／[15](特活)環境の杜こうち／[16](特活)おきなわグリーンネットワーク／[17](特活)くすの木自然館

【表付録 3-2: 協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく
「プロジェクト・マネジメント」/「協働ガバナンス」の提案・改善点】

| 提案・改善点 | | |
|--------------------------------|--|--|
| | 「プロジェクト・マネジメント」(事業) | 「協働ガバナンス」(協働) |
| [1] 公害資料館ネットワーク | <ul style="list-style-type: none"> ● 世界への発信方策。[1] ● 海外ネットワーク構築による影響力の向上。[1] ● 世界へ発信。現在進行形の公害に対して、どういった提案ができるのか？[1] ● 取り組みをパンフ化しては？[1] ● 具体的資料や医学的資料の共有があるといい。[1] ● 語り部の減少にどう対応していくのか。[1] ● 語り部の生の声大事。歴史からどう学ぶか、ESD 行動促進プログラムへ。[1] ● 世界にむけた資料館ネットワークの役割は？[1] ● 事務局をまわす仕組み。[1] | <ul style="list-style-type: none"> ● ネットワークとしての周辺ステークホルダーへのアプローチの向上[1] ● 1年を通じた協働による変容の可視化。[1] ● ネットワークに参加しなかった資料館の取扱い[1] ● ネットワーク形成に得られたノウハウの共有[1] ● 3年間のプロセス、成果と課題の可視化。[1] ● 協働のアプローチにおける試行錯誤も連携先と相談・共有しては？[1] ● 事務局をまわす仕組み。[1] |
| [2] 人と海鳥と猫が共生する天売島 連絡協議会 | <ul style="list-style-type: none"> ● 「ネコの増えた原因」「ネコの数」等の数値的な情報を明らかにしてもらいたい。[2] ● ノラネコはどのくらい島にいて、譲渡はどのくらい行う予定なのか。[2] ● ノラネコの減少数と生態系への影響について調査結果の共有を。[2] ● 元々この島にどれ位のネコがいて何が原因で増えたのか。[2] ● 過去と現在までのネコの増減状況をデータでしっかり把握すべき。[2] ● どのくらいまでネコが減れば適性なのか？[2] ● 海鳥保護の結果をデータで示すと成果が客観的でわかりやすいのではないか。[2] ● 環境教育は？「保護・馴化」(現在)と「教育」(未来)の両輪が必要。「教育」にも力を入れては？[2] ● ESD 教材にしては？[2] ● 子どもたちと連携しては？[2] ● 全国の動物好きの小学生のためにストーリーそのものを絵本にしてほしい。そうすることで、ファンが全国に広がり、資金支援や来訪につながる。[2] ● ノラネコを増やさない対策＝猫の捕獲！ノラネコゼロが目的？[2] ● 天売猫をブランド化できそう。[2] ● 天売島にネコカフェをつくる。[2] ● ネコカフェのようなところに引き取ってもらってはダメなのか？[2] ● フェンスで囲っては？[2] ● 生態系の管理は不要？島だけではなく、周囲との連携は不要？[2] ● ドブネズミの問題は別に考えた方がいいのは？[2] ● 来訪者が増えることで生まれる環境リスクへの対応は？[2] ● 里親探しに Facebook とか活用？[2] ● 繁殖地の地権者は？[2] ● 海鳥を観光資源としている事例は？海鳥保護の物理的な拠点は？[2] ● 参考事例は？[2] | <ul style="list-style-type: none"> ● 今後の島民の巻き込みの具体的手法は？[2] ● 財源は？持続可能な仕組みか？[2] ● 連絡協議会発足の経緯は？[2] |

| | | |
|--------------------------|---|--|
| <p>[3] 三素</p> | <ul style="list-style-type: none"> ● 小水力の電気は、日常的にはどのように使われるのか？ [3] ● 対外的 PR に「防災」をキーワードとすると受け入れやすい。 [3] ● 村民の意見を活かす。 [3] ● 参加型調査を村の学びの場として位置づけるべき。 [3] ● 子どもがかかわれないか？ (小学生は 6 年生で自然エネルギーを学ぶ) [3] ● 星野リゾートの電力が全て自然エネルギーになるといい。 [3] | <ul style="list-style-type: none"> ● 富良野の人と占冠の人の相互参照の場づくり。 [3] ● 村民の意見を活かす。 [3] ● 参加型調査を村の学びの場として位置づけるべき。 [3] ● エネルギーの“地産地消”という観点でこの取り組みを位置づけると意義が高まる。 [3] ● まずは対象となる地域のペース、活動のステークホルダーの十分な分析・検討を。 [3] ● 次世代についてのことはどう考えているのか。 [3] |
| <p>[4] あきた地球環境会議</p> | <ul style="list-style-type: none"> ● ひきこもりという表現にあまりいい印象を感じないので、誰もが楽しく働く！ いろんな人が関わることのできる地域環境産業、環境教育プログラムなどの見せ方はどうか。 [4] ● 木ハガキの販売を良好にまわす仕組みは？ 購入層は？ ニーズは？ [4] ● ひとつの事業を採算ベースにのせるために具体策が必要。 [4] ● 事業採算性は？ 事業の継続性は？ [4] ● 町内の名産品に木工製品を活用するようなコラボを模索してはどうか。 [4] ● なぜ引きこもりが多いの？ [4] ● 木ハガキはどのくらいできたか？ [4] ● 木ハガキ以外はないのか？ [4] ● 新たに創出された従業者数(雇用)は？ [4] | <ul style="list-style-type: none"> ● 林野庁へ売り込んだらどうか。 [4] ● ひきこもりという表現にあまりいい印象を感じないので、誰もが楽しく働く！ いろんな人が関わることのできる地域環境産業、環境教育プログラムなどの見せ方はどうか。 [4] ● 活動の継続への費用対効果を評価してみても？ [4] ● コーディネート、人材の育成をしてみても？ [4] ● 福祉×環境のかけ合わせの壁や突破するコツの可視化してほしい。 [4] ● 「引きこもり」の人がどのように「働くこと」の意義を主体的に持つようになるか？ [4] ● 社会復帰について具体的に人を動かすのにどのような協働を行ったのか？ [4] |
| <p>[5] マイムマイム奥州</p> | <ul style="list-style-type: none"> ● 環境保全と経済の効果を数字で説明できるとインパクトがあるのでは？ [5] ● 奥州市へ環境教育プログラムとして新提案をして、再度行政も巻き込む。 [5] ● 他地域、市町村に波及はさせないのか？ <モデル化> 広げた方がよい。 [5] ● 休耕田対策としては野鳥の取り込みや虫や花などを調査してみてもどうか？ [5] ● 地域の麴菌の育成をしてはどうか(より地域色を出す戦略として)。 [5] ● コンサルに他地域へも来てください。 [5] ● 米が清算されることでまわりの米市場価格が下落しないか？ [5] | <ul style="list-style-type: none"> ● 共通ビジョンを話し合う場づくり。 [5] ● 活動の継続への費用対効果を評価してみても？ [5] ● 地域の人にどのように伝え、参加の体制を具体的に示すべき。 [5] ● 住民をステークホルダーに加える仕組みは？ [5] ● さらなる住民参加、「学」の参加は？ [5] ● 地域の課題にするためにどうするかを明確にすべき。 [5] ● 休耕田がもたらす影響、課題を共有することがまず重要。 [5] ● 10 年で浸透しないのであれば、世代のターゲットを低い方に移していくこともありでは。 [5] ● 昔からの農家との関係性はどうか？ [5] |
| <p>[6] オイスカ</p> | <ul style="list-style-type: none"> ● 今後の方向性見えにくい。どのような自立発展性の仕組み？ [6] ● 相模原の自然環境観察員制度も参考にしているのか。 [6] ● そもそも保安材を使う→植える、というサイクルが必要ではないか。 [6] ● 観光ルート/食/ボランティアにおいてジオパークと関連付けてみては。 [6] ● 食べてもらうという仕組みは大変では？ [6] ● “食”と“森林”保全とを分かり易く結びつけられれば、さらに輪が広がるのでは？ [6] ● お林魚のブランド化。都会からボランティアをつのり、お礼にお林魚を提供するなど。 [6] ● 再生への確実な手立て(調査)の構築。 [6] ● 調査人数？ 参加者の内訳は？ [6] ● 調査参加者の内訳は？ [6] ● 調査の予測は？ [6] ● 今後も調査活動を拡大実施していくのか？ [6] ● 住民×御林に関心がある人の割合は？ [6] | <ul style="list-style-type: none"> ● 地元中核主体への活動の引渡しをどのようにしていくのか。 [6] ● 町長のトップダウンだったものが、今は町×オイスカと協力関係か。施策での位置付けは？ [6] ● 行政の方は異動してしまうのにどう継続する？ [6] ● 外の人(オイスカ)からみた協働の阻害要因、促進要因の可視化。 [6] ● 一つでも地元のコアパートナーを見つけ協働体制をつくっては？ [6] ● 観光客の巻き込みは？ [6] ● 都市圏観光客が参加しやすい場づくり。 [6] ● 地域の子どもの参加促進。 [6] ● 子どもへのアプローチ。 [6] ● 単発参加者も参加できる取組があるといい。 [6] ● 今ある森林をそのまま未来につなぐことを目指すのか？ [6] ● 7000 人の町民の属性は？ [6] ● アピールタイムでは町の顔が見えなかったため、この取組により町の意識の変化、施策への影響などを |

| | | |
|--------------------|---|--|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ● もっと可視化してはどうか。[6] ● 調査や活動に参加している町民の年齢層は？[6] ● 森の将来の姿はどんなものか？共有されているか？[6] ● 目的、ゴールの設定と共有をどの程度できているか？[6] ● クローズドな中心メンバーと、外からの力(オープンな間口)をどのようにつなぐのかが、今後の肝ではないか。[6] |
| [7] さがみ湖森・モノづくり研究所 | <ul style="list-style-type: none"> ● 間伐材→チップに。ボイラーの普及をしてみようか？地元産のペレットストーブ、富裕層の巻き込み。[7] ● 加工材の活用先を広げていくといい。将来的には林業の担い手の育成をどうすすめるかが課題では。[7] ● なぜ本事業に申請したのか？メリットは？[7] ● 年と森林をかねそなえている地域の特色をもう少し活かせるイベントはないか。都市と森林の新しい関係。[7] ● 桂川(山梨県)、相模川(神奈川県)流域の連携を強くしてほしい。県境が邪魔している。[7] ● どうやって経済をまわすか。まだ商売になっていない。[7] ● 事業の採算性などで継続できるようになる展望はあるのか。せっかくながったので展開を期待。[7] ● 今後も広げ続けるのか。[7] ● 現場のドラマが経済に結びつかない。それをどうやるか。[7] ● 他の地域に展開できるようにしてほしい。[7] | <ul style="list-style-type: none"> ● かなり多くの団体のコミュニケーションを促すコツや失敗例の可視化。[7] ● 川上、川中、川下のサプライチェーンはどの程度巻き込んでいるか。[7] ● 川上、川中、川下の課題がどこまで解決できたのか見えるようにしてほしい。[7] ● 利害関係、どう調整？[7] ● 山間部と都市部の森に対する意識格差が大きい。これをどう埋めるか。[7] ● 責任をどこが持つか。[7] ● フォーラムという形式のメリットは？[7] ● メリットは全てのステークホルダーあるのか？そういう仕組みにしてほしい。[7] ● たくさんの人たちを巻き込むのは良いことだが、まとめるのが大変では。[7] ● 集まった人(団体)たちにどうなってほしいか。[7] ● 相模原ベースでモデル化を期待。市民中心で意見をまとめていく。[7] ● かなりの数のワーキンググループを並行して進められているのがすばらしい。それを可能とした理由は？[7] |
| [8] 若狭高浜観光協会 | <ul style="list-style-type: none"> ● 長期的にはグローバルサステナブルツーリズム協議会(GSTC)の取得もどうか？[8] | <ul style="list-style-type: none"> ● 住民を信じるといい。[8] ● 行政として、この事業の意味を可視化すると分かりやすい。[8] ● ブルーフラッグの有する地域マネジメントのノウハウを今後の協働取組に最大限に活用していただきたい。[8] |
| [9] 中部リサイクル運動市民の会 | <ul style="list-style-type: none"> ● 行政の施策になるメリット・デメリットは？[9] ● 詳しく商品など知りたい。古いビンフェスや江戸ガラスなど日本のビン文化は多様。[9] ● リユースビンの形状規格が統一されているなら流通もしやすいが、(市民等にわかる)協働は難しいか？[9] ● お酒以外の食料への広がり。[9] ● Before-After を(数字も使って)もっとPRしては？[9] ● イベントとかで普及させるといい。[9] ● 学校給食でも採用してはどうか？[9] ● なぜ日本酒ビンに限定？ワイン、調味料への展開は？[9] | <ul style="list-style-type: none"> ● 「見せる人」が具体的にどんな作用をしたのか知りたい。[9] ● 利害が発生する可能性のある組織との関係作りにおけるコツの可視化を期待。[9] ● 見せる人+経済評論家をどのようにくどいて参加してもらったか？[9] |
| [10] 吉野川紀の | <ul style="list-style-type: none"> ● 産業化への展開。[10] ● 和歌山大学の観光学部が面白い活動をしているので、何かヒントがあるかもしれない。[10] ● “しらす”を上流で売り、“木材”を下流で売る。[10] ● 流域での市民科学ネットワーク構築。(水調査、地域産業)[10] | <ul style="list-style-type: none"> ● エリアが広いので、これをどうつなげるかが最大の課題。協議会の分科も一案か。[10] ● 森づくり、林業の課題を流域で共有するしくみづくりを。[10] ● ノウハウ(特に立ち上げから地元参画まで)の発信共有をより具体的に。[10] |

| | | |
|---------------|---|---|
| 川源流物語 | <ul style="list-style-type: none"> ● 協議会としての振興ビジョンづくりに是非挑戦をしてもらいたい。[10] ● 産業、ものづくり、ものの移動そのものも一流であってほしい。[10] ● 子どもたちが作る“水質マップ”。[10] ● 環境教育学校における「カリキュラムデザイン」との関係は？[10] ● ESDとしての到達目標は？[10] ● ESDを実践する場として学校にこだわる必要はないのでは？[10] ● 財団設立 10 年とのことだが、どういっかけて今回の取組に踏み切った？[10] | <ul style="list-style-type: none"> ● 教材化のゴールは？どう定着させるか、しかけをどうしているか。[10] ● ゆるいつながりということか？[10] ● 流域で活動する市民団体とのつながりは？[10] ● この事業は期間が限られているが、資金面で今後どうやっていくか考えているか？[10] ● 関係者へのヒアリングにはどんなメンバーで行ったのか？[10] ● 一次産業の従事者が集まって話す機会はどれくらいあったのか？[10] ● ヒアリングを戦略的におこなったか？[10] ● 地域間のあつれきはあったのか？[10] ● この事業をきっかけに役所内外で動きはじめたことはあったのか？[10] ● 真の流域連携とは、どんなことなのか？[10] ● 人事異動は避けられないが、それにどう対処するか？[10] ● 協議会の意義を再確認する機会はあるのか？[10] |
| [11] bioa | <ul style="list-style-type: none"> ● モデル校での取組を波及させる為の具体的方策は？[11] ● 副教材づくりを糸口として進めていく方法もある。[11] ● 来年度以降の取組は？[11] ● 資金的な持続性は？[11] ● これまでの環境教育とはどう違う？[11] ● ESDを継続するための工夫(基金や施策化など)が必要。[11] ● プレイヤーと環境行政はしっかりつながっているのであれば、あとは教育委員会の巻き込み方。[11] ● 自治体が学校に環境学習プログラムをつなぐ仕組みをつくっては？[11] ● 茨木市と大阪府の環境教育団体同士のツールや情報の共有もしていけたら。[11] ● 環境基本計画の中には位置づけられているが、具体的なアクションプランにはなっていない[11] ● 32 校全部一気に進めるのは無理なので、モデル校を市で募ってはどうか。[11] | <ul style="list-style-type: none"> ● 小学校での授業プログラム実施に至った経緯、誰を巻き込んだかを知りたい。[11] ● 既存の環境リーダーとの連携は？[11] ● bioa さんと各主体とのかかわり合いについて運営手法は？[11] ● 住民同士の仲間づくりを進めては。[11] ● 地域市民の巻き込みはどうか？地域の歴史を知るのは元々住んでいる人だと思うので、ESDの視点でのプラットフォームに農村の方が参加できると良いのでは？[11] ● bioa 以外の環境教育団体はどうする？ESDのテーマをお金持ちの団体や組織のテーマに近付ける。[11] ● 大学のゼミや研究を教育に活かしてもらう方法もある。[11] ● 教育を受ける子どもが地域づくりの担い手になるようにするといい。[11] ● ネットワークを自立したものにし過ぎない。(行政職員が異動した時も継続させるために)[11] |
| [12] アンダント 21 | <ul style="list-style-type: none"> ● | <ul style="list-style-type: none"> ● 学習活動(小学、中学)を参加させる手法を詳しく知りたい。[12] ● メディアを対立的ではなく、活動への賛同者として巻き込めるといい。[12] ● 汚染源企業の立場に立った巻き込み方。[12] ● 提言策定のプロセスでの気づき、学びの可視化。[12] |
| [13] みずしま財団 | <ul style="list-style-type: none"> ● 八間川で大人が遊ぶ。[13] ● 独自で継続して運営する方法の構築は？(運営資金等)[13] | <ul style="list-style-type: none"> ● 学生が自分たちで始めやすいワークショップなどを開いてはどうか？[13] ● ステークホルダーが主導(?)者になるといい。[13] ● H28、次のステップに進むためにステークホルダーのニーズ、協議会でやりたいことの整理が必要。そのうえで協定などを利用。[13] ● 日本ではまだオーフス条約がない。しかし、協議会の場を大切に継続することで見えてくる。[13] ● 連携の幅(深度)を広げるべき。まだ接点が薄い。[13] ● 協定などの具体的目標(見える)を定めることで、持続するのでは。[13] ● 3 年モデルだからこそできたことの可視化。[13] |

| | | |
|----------------------------|---|---|
| <p>[14] 森からつづく道</p> | <ul style="list-style-type: none"> ● 春休みなどを利用したインターン制度をつくっては？ [14] ● 他の県からユースを呼べないか。高専、大学(農・商)など。 [14] ● 市外の学生のまきこみ。 [14] ● 市役所との連携であるが、環境モデル都市づくりの政策立案につなげていくかが鍵。 [14] ● 事務局の負担軽減の工夫(分担)。 [14] ● 今後展開するためのプラットフォームはできているのか？(事務局、予算) [14] | <ul style="list-style-type: none"> ● 市の保全計画との整合性の確認を。 [14] ● 地域連携保全活動計画のどの部分を進めているのか示す必要。具体的な活動の内容を決める際はこういうプロセスで決めたのか示す。 [14] ● まだ巻き込めていないと思う団体(ステークホルダー)はいるか？ [14] ● 大学や学校にアプローチしてみても？ [14] ● 共通の目標をどう共有したか。 [14] ● 松山市が策定した「地域連携保全計画」と本事業の活動の内容は一致している？ [14] ● 環境モデル都市「生物多様性保全」は組み込まれているの？ [14] ● JAは？ [14] ● もしも団体さんがいなければ、この課題に対して市はどうしていたと思うか？ [14] ● ロイヤルアイゼンへのアプローチはどのように行ったか？ [14] |
| <p>[15] 環境の杜こうち</p> | <ul style="list-style-type: none"> ● マンネリ化しないような(テーマの工夫等)が必要と思われる。 [15] ● 学校の先生が環境学習できるようになるためのスキルアッププログラム作り。 [15] ● 先生が教えられるようになるためのプログラムは？ [15] ● 今後は、テレビ高知など、大きな媒体にも大きく広報されるといい。モチベーションが高くなる。 [15] ● 流域をめぐるスタディツアーをやってみては？ [15] ● 川の分析は？ [15] ● 環境教育のテーマが川(河口)をきれいに。言葉だけでなく、自然保護、温暖化問題にもつながるような広がりをもつと、環境教育のフィールドが広がるのでは。 [15] ● 先生の授業の中で活用できる場を使う。 [15] ● 学びの場、施設、企業、市民団体の現場活動。 [15] ● 授業後のアンケートはまとめているのか。 [15] ● 学校とのアプローチは教育委員会でなく、学校長へアプローチ(「校長会」とか)も有効と思う。 [15] ● 大学との連携は？(高知大、農学部など) [15] ● 平成28年度はモデル校で実践する。 [15] ● 受験等などの現実について先生方はどう思っているか？ [15] ● 「美南国」を「チュラグニ」と呼んで？ [15] | <ul style="list-style-type: none"> ● まずはビジョンをつくり共有しては。 [15] ● エコシティプロ内部の方針や理解共有は十分か？成果への役割、貢献が見えない。 [15] ● 自治体との対話を行う上で、留意点の可視化。 [15] ● 子どもたちのために地域の人の目に触れるように。 [15] ● 地域の人たちが動く連携が必要。 [15] ● 今年度は基礎になるつながりの一歩。 [15] ● 地域の子どもたちのためになることには、いろんな人や組織は協力できると思う。 [15] |
| <p>[16] おきなわグリーンネットワーク</p> | <ul style="list-style-type: none"> ● 植栽に対する協力農家さんの反応はどうか？ [16] ● JAをもっと巻き込むべきでは？ [16] ● 事業継続のため、資金を自ら獲得・創出できるか？ [16] ● いろいろな種類(色)の赤土をビンの中に層状につめたらアートの商品になるのでは？ [16] ● 泥団子学習キッドを開発すれば、収入になるのでは？ [16] ● ふるさと納税や観光(民泊)、ベチパーの活用などを農家と連携する。 [16] ● ベチパーやレモンガラスの葉は防虫効果のあるマルチになる。 [16] ● 土に特化した環境教育プログラムができないか？ [16] ● 小学生と高校生では環境教育の内容は違うのか？ [16] ● 環境学習に中学校が入っていないが、意図的にそうしているのか？ [16] | <ul style="list-style-type: none"> ● 多様な主体(とくに農家)を巻き込む工夫やノウハウを聞きたい。 [16] ● 多様な主体に働きかけるさいに作成したビジョンやしくみの資料作成、コツの可視化に期待。 [16] ● 強みを活かす関係づくりの中で、団体自らの振る舞い方が重要。 [16] |

| | | |
|-------------------------|--|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ● 土に特化した環境教育プログラムができないか？ [16] ● 学校教育で土のことをきちんと教える課程がないので、土のことを教えることは大切。 [16] ● 泥団子づくりは子どもが夢中になるので、都会の子ども向けにプログラム化しても面白い。 [16] | |
| <p>[17] くすの木自然館</p> | <ul style="list-style-type: none"> ● 26年度事業とどう違ったのか。 [17] ● 昨年度の県事業の成果と今年度の加速化事業の成果の違いは何か？ [17] ● 出前講座でいった小学校はステークホルダー図には入っていないのか？ [17] ● 外部メディアでの情報発信の取組は？ [17] ● 法的拘束力のある施策、例えばラムサール条約の条件はクリアしているのか？ステークホルダーには周知しているのか？ [17] ● 自治会の力は弱い、鹿児島はどうなのか？ [17] ● 今年度の着地点はどこか？ [17] | <ul style="list-style-type: none"> ● ステークホルダーの役割(働き)をもう少し具体的に知りたい。 [17] ● ネットワークの中で、行政の役割は何か？また、くすの木の役割は何か？ [17] ● ステークホルダーの拡大が当面の目的か？拡大により変わったことは？ [17] ● 今後、地域の誰を対象に、どうやって戦略的に連携を拡大・維持を進めるのか、具体性が見えにくい。 [17] ● 自治会への最初のアプローチは誰が、どうやって行っているのか？ [17] ● 地域の軋轢や利害の衝突はあったか？ [17] ● キーパーソンを設けて、ネットワークとしての活動をもっと進めてもよいのでは？ [17] ● 企業はどのようにかかわることができたのか？ [17] ● 年度ごとのネットワーク効果の見える化と、それをステークホルダーと共有する。 [17] ● 法的拘束力のアイデアは？また、その際の住民の役割は？ [17] ● 懇話会参加住民の意識・行動の変容の可視化。 [17] ● オイスカのように、現場の確認プロセスを取り入れてみてはどうか？ [17] ● 自治会への最初のアプローチは誰が、どうやって行っているのか？ [17] ● 地域の軋轢や利害の衝突はあったか？ [17] ● 今年度の加速化事業のキーパーソンは誰か？ [17] ● 各ステークホルダーの取組の熱意の違いは？ [17] ● 新規ステークホルダーが参加したことにより加速化したことは何か？ [17] |

[1]公害資料館ネットワーク/[2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会/[3](有)三素/[4](一社)あきた地球環境会議/[5]♪米 im♪My 夢♪Oshu(マイムマイム奥州)/[6](公財)オイスカ/[7]さがみ湖森・モノづくり研究所/[8](一社)若狭高浜観光協会/[9](特活)中部リサイクル運動市民の会/[10](公財)吉野川紀の川源流物語/[11] bioa(ビオア)/[12](特活)アンダンテ 21/[13](公財)水島地域環境再生財団(みずしま財団)/[14]NPO 森からつづく道/[15](特活)環境の杜こうち/[16](特活)おきなわグリーンネットワーク/[17](特活)くすの木自然館